



始まりは19世紀の中継貿易

上環 乾物屋街



香港きってのオフィス街、セントラル中環の西隣に位置する
ジョンワン上環に香港随一の乾物屋街がある。2階建てトラムが走る徳輔道西の両脇に、ざっと100軒の乾物店が連なり、フカヒレ、アワビ、ホタテ貝柱といった海産のほか、塩漬けの肉類、ツバメの巣、漬け物、椎茸、豆、麺、茶葉などの乾物が売られる。1本海側の干諾道西には米問屋が、また、徳輔道西に続く文咸西街と高陞街にはそれぞれ海産乾物問屋と漢方薬問屋が集まっている。

植民地に集まった南北行

香港の乾物類を扱う店が上環に多いのには歴史的な背景がある。英国が南京条約で香港島を手に入れた1842年以降、香港には一攫千金を狙う英国人商人が流れ込むようになったが、それは機を見るに聡い中国人商人も同じだった。英国人らが建設を始めたビクトリア・シティ(現・中環)は中国人の居住が禁止され、西隣の土地が中国人居住区として割り当てられた。それが現在の「上環」一帯である。中国人商人たちはここで貿易に精を出した。東南アジアから、米、ヤシ油、ゴム、木材などを北の中国大陸へ運び、中国大陸から、漢方薬、海産乾物、大豆などを東南アジアへ運んで売りさばいた。この商いをするのが「南北行」なる問屋。香港は中間地点にあり、品物運搬や業務決済に都合がよいため、この種の問屋が集中していった。

最初、上環の南北行の多くは潮州

人の経営だった。英国の香港占領のはるか以前から、タイ産の米を大陸へ運ぶなどの豊かな貿易経験を持っていた潮州人が、上環でも先んじたのだ。1850年、潮州出身のタイの米商人、高楚香が、当時まだ海岸線だった文咸西街に南北行の「元發行」を開店したと記録に残る。これを皮切りに文咸西街には南北行が次々と開業し、「南北行街」と通称されるまでになる。時代が移り、南北行の取引先は、日本、韓国、欧米ほかに広がったが、文咸西街が問屋街であることに変わりはない。ただし、19世紀後半の埋め立てで海岸線が変わったことなどにより、米問屋の多くは干諾道西へ、漢方薬問屋は高陞街へ移った。現在の文咸西街は海産乾物問屋が大半を占める。

乾物は株と同じ？

そして、乾物の仲卸兼小売店が軒を連ねる徳輔道西。元は、塩漬けにし

た魚を乾燥させた鹹魚を専門に売る店が集まった梅芳街に発祥し、徳輔道西へと広がったといわれる。

植民地香港とともに登場した一大乾物エリア、上環。素人目にも興味深いのは、断然、徳輔道西だ。歩道にはみ出して並べられるおびただしい数の乾物。ホタテ貝柱、フカヒレ、朝鮮人参、椎茸などから、トカゲの開きなど少々グロテスクなもの、なかにはえたいの知れないものもある。

「今日は何がほしいの」、「このホタテは上物だよ」。冷やかしていると、店員から声がかかる。脇をすりぬけて、大きな箱を入荷する業者、店員と丁発止の値段交渉をする客、カメラを構える観光客、活気はなかなかのもの。乾物が入る段ボール箱に印刷された「MONBETSU」、「TOKORO」など、北海道の地名が目にとまる。貝柱、フカヒレ、アワビなどの乾物は日本産が珍重される。問屋が日本の漁業協同組合と特約し大量に買い付け

るため、貝柱など日本よりも安いというところがあるから驚く。もつとも、その貝柱は昨年の春から夏にかけて、卸価格が50%も値上がりした。ひとつにはホタテ水揚げ高の減少、もうひとつには日本の景気回復で消費が増加したための輸出货量の目減りがある。ある乾物問屋の経営者は、「品薄を予想して大量に買い付けてあったので、かなりもうかりました。乾物もね、株や為替みたいなものですよ」とからからと笑ったものである。

近年、乾物屋街に変化が起きている。個人旅行自由化による大陸中国人観光客の激増だ。大陸で偽物が横行する冬虫夏草などの高級漢方薬を買いあさる人がおり、フカヒレなど高級中華食材をまとめ買いする業者も多いという。かつて漢方薬や海産乾物は北から南へ流れた。いま、そのうちの高級品は、中国の高度成長に吸い寄せられるようにウターンを始めた。

大沢 岳

海産乾物店が最初に集まった梅芳街